

2025

HARVARD-YENCHING
INSTITUTE WORKING
PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における
アリスの冒険

**AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S
ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN**

Aoyama Waka | The University of Tokyo

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険 Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

Abstract: These essays are the first drafts of the chapters for an autoethnographic fiction titled *Fustuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual)*, scheduled for publication in 2027. From June 2024 to February 2027, approximately 20 chapters, including a prologue and an epilogue, are planned to be written in Japanese. The work is based on the author's personal experiences and follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese. The story portrays Alice's everyday use of multiple languages. While Japan is often misunderstood as a "monolingual society," the work shows that it is, in fact, a "multilingual society," and it challenges the concepts of "ordinary" and "equality" in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored, with a narrative of homeland loss and regeneration. The work encourages critical reflection on our unawareness of the privilege of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies we live with, aiming to bring out the reader's own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, it seeks to explore the possibilities of creating a socially just world. In order to prepare for the publication of a future English edition and to explore the impossibility of translation, English translations of all chapters are included.

Keywords: Multilingual Japan, Language Use, Being Ordinary/Normal and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

要約：これらのエッセイは、2027 年度に出版予定の『ふつうのマルチリンガル』という自伝的民族誌的フィクション作品の各章の初稿である。2024 年 6 月から 2027 年 2 月にかけて、プロローグ、エピローグを含む約 20 章が日本語で執筆される予定である。本作では、著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が、日常的に多言語を使う様子を描く。日本が「モノリンガル社会」と誤解されがちである一方、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」を言語使用の観点から問い直す。多様性、共生、歴史的加害性、言葉の力をテーマに、故郷喪失と再生を描く。とくに「日本語」や「英語」の特権性や言語的ヒエラルキーに無自覚なわたしたちに対する批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を引き出すことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的公正な世界への可能性を探る一冊である。将来の英語版の出版に備えるために、また翻訳不可能性を探るために、全章の英訳を付す。

キーワード：マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつうと平等主義、歴史的加害性、批判的メタ言語意識

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

東京大学東洋文化研究所
青山和佳

7 東海岸 The East Coast 「アメリカ」を探して I

日吉の図書館から、デラウェアへ

ここではない、どこかに行きたい、でもそれはとても特権的なこと

指定校推薦で進学した私大の商学部で学ぶことに、わたしは何の情熱もなかった。受験のプレッシャーからは解放されたけれど、自分であることのプレッシャーから解放されたわけではない。一、二年次から商学の基礎を固め、商学の専門を培うために、経済学や経営学や商業学や会計学や微積分や統計学が必修科目として並ぶ。「変化し続ける経済社会のビジネスリーダー」になれるよう、「時代を見抜く目」、「専門知とスキル」、「世界の人びととコミュニケーションする力」を養うというカリキュラム・ポリシー。この歴史ある素晴らしい教育・研究環境で、情熱がないというのは罪のように感じられる。やめることはできない。推薦入学者としての責務を果たすべく生真面目に勉強する。成績は晴ばれしい。でも、青空はひび割れている。

外国語教育が充実していることに救われる。英語ともう一言語を履修することになる。スペイン語はない。ドイツ語かフランス語の選択肢からフランス語を選ぶ。ラテン語系の言語としてスペイン語に近い。商学部で女子学生が少ないなか、フランス語選択者が多い。英語は若い男性の文学研究者が日本語で指導する。映画を観てディクテーションやリテリング、プレゼンテーションなどに取り組み、グループ活動もあって色彩ゆたかな時間になる。フランス語は年配の男性の文学研究者が担当し、文法訳読法で進められる。進度は速く、『モンテ・クリスト伯』が教材になった頃には復讐の物語にこころを奪われたものの、発音にふれる機会が少なくてテキストに呼吸を通しにくい。水のないプールを泳ぐようにつらい。

二年生を修了したら、一年間休学して、「アメリカ」の大学に編入したい。親が援助してくれるものの、アルバイトで資金を貯めることが条件だから、家庭教師をかけもちし、くるくるすごす。大学の国際センターで相談し、願書や TOEFL のスコア、成績証明書、推薦状、エッセイをそろえて希望先の大学に提出する。めどがつき、ほっとしたある日、図書館に入ろうとしたら、「アリス！」と声をかけられた。顔をあげると高校の同級生で、出席番号がわたしの次だったサッカー部のナナセが笑っている。あいかわらずのさわやかさだ。「おれもイギリスに留学するよ」。おお、同志だったのか。数日後、ナナセは炎に包まれて空に溶けるように、この世から消えていった。お葬式に同級生たちと集まる。ナナセ、そっちに逝ったのは、なぜ。

二十歳の四月、初めて「アメリカ」— ^{メインランド}本土 という意味で— に渡る。六月に大学の ^{summer session} 夏学期が始まるまで時間があり、留学生向けの英語コース (ESL) を受けることにする。東海岸の全米で二番目に小さいデラウェア州を選んだのは、ぶどうの名前を思い浮かべたからだだった (実際にはぶどうのデラウェアはオハイオ州由来で、この州名はバージニア植民地初代総督のトーマス・ウェスト (1577-1618)、第三代デ・ラ・ウェア男爵に因んでいる。そう名づけられたとき、もともとの地に暮らしていた人びとに何が起きただろうか)。デラウェア大学は緑豊かで広々としており、学生は白人、つぎにヒスパニック¹が多い。すでに他大学の入学許可を得ていたわたしは、授業をぬけだし、デュボン・ホールにピアノを弾きに行く。この州は「法人の州」として知られ、会社設立が容易で多くの有名企業が本社を置く。デュボンはそのひとつで、のちに、有害な化学物質 C8 (正式名称: ペルフルオロオクタン酸、PFOA)²により、深刻な環境汚染と健康被害を引き起こす。本社のまわりではなく、工場のまわりの地域で。都市ではなく、田舎の農村地帯で。

アイオワから、ワシントン D.C.へ

デラウェア大学のある学園都市はニューアーク (Newark/'nu:ɑ:rk/)。New と ark になる二音節なのに、わたしには New + wark と余計な子音 w をつけるクセがあり、「は? どこ? ニューヨーク?」と聞き返されつづける。あ、わたし、綴りにない音を足している! そりゃあ、聞き返されるよね、それに「アメリカ」人って、頭蓋骨から胴体全体までを太い息の流れで震わせるように「でっかい」(わたしにとって) 声を出すから、わたしももっと息を吸い込んで、「でっかい」川の流れのように音をつくったほうが通じやすいよね。ストロベリーショートケーキと、strawberry shortcake はぜんぜんちがう音楽になるし、食べてみてもぜんぜんちがうよね。どっちもお菓子はお菓子でおかしい。そう気づくころに、ESL を修了していた。

五月、ニューアークの日本出身留学生仲間たちに見送られて、中西部のアイオワ州の都市シーダーラピッズ (Cedar Rapids/'si:dər 'ræpɪdz/) に向かう。その地にあるリベラルアーツ・カレッジに夏学期から編入するつもりで、ついに「アメリカ」の大学生になるのだとわくわくしていたのに、飛行機がその上空にさしかかり、なだらかな土地に大きく区画され、すがすがしい緑の畑が果てない風景が目に見え込んできた。わたしはすっかり闇に包まれてしまう。シダが現れて言う。「アリス、ここは無理だね、海から遠すぎる」。そこにはきっと風が低く草原をなでる音が広がり、乾いた土と草の香りを運んでくるだろう。わたしにとって新しく美しいものであるはずなのに、波のささやきが恋しくてたまらない。入学をやめて、ボストンに飛ぼう。

¹ 執筆メモ: Latinx (中南米にルーツをもつが、いまは北米で暮らしている人)、用語、あとで確認。凡例?

² アメリカ合衆国において、この化学物質が規制され始めるのは、二〇〇〇年代以降。

マサチューセッツ州のボストン (Boston, /'bɒstən/) には、ダスタとトムを訪ねる。ダスタは、わたしの幼なじみで代母^{godmother}³でもある友人の文通相手で、ポーランド出身だ。トムと結婚してボストンに移住し、ふたりはボストン・コモン―「アメリカ」最古の都市公園―近くの写真学校に住み込んでいる。スタジオのひとつに泊めてもらう。ウェディングドレスが飾ってある。これからどうしよう。「アメリカ」に来たばかりなのに、日本に帰れない。ダイナーで、パンケーキとベーコン（バラ肉ゆえに熱されると染み出る自らの油で自らを揚げるためにカリカリ）とスクランブルエッグにバターとメープルシロップ添えの朝食をとりながら相談する。「他大学の学生でも受講できる夏学期を受け、そのあいだに編入先を探せば？」と提案してくれる。ふたりに手伝ってもらい、スペイン語コースが受講できる大学を見つけた。

ワシントン D.C. (Washington D.C.) に向かうべく、ボストンのサウスステーションからアムトラック⁴に乗る。ニューヨーク (New York City) に立ち寄り、マンハッタン (Manhattan, /mæn'hætən/) の中心部のホテルに泊まり、美術館をいくつか訪ねる。メトロポリタン美術館に入ると広すぎてどこから見てよいかわからない。カフェで初老の紳士―この美術館の会員だという―と隣り合わせ、「きみは幸運だね、ゴヤ展⁵をやっているよ」と教えられる。高校卒業前にプラド美術館でみた「一八〇八年五月三日マドリッド」が浮かび苦しい。ここでも晩年の「黒い絵」をみて、暗澹たる感情に包まれる。最後に展示されたゴヤの遺作「ボルドーのミルク売り娘」―どこか安定感を欠き、ふわふわとした構図のなかで夢みるような若い女性―が放つ柔らかな光に包まれて、わたしはようやく息を吹き返した。

ジョージタウン、初めてのスペイン語

ジョージタウン (Georgetown, /'dʒɔ:rdʒ.taun/) は、ワシントン D.C. の西端、ポトマック川沿いに広がる古い街で、かつて港町として栄え、十八世紀には奴隷制の影響下にあった。解放後、多くの黒人⁶が暮らしていた。時代とともにその風景は変わり、いまでは石畳の道と高級ブティックが並ぶ観光地になっている。その中心にあるジョージタウン大学―「アメリカ」最古のカトリック系大学―の赤レンガの建物群は、荘厳な雰囲気なのに、どこかファンシーで軽さを感じてしまう。この夏、わたしはここで初

³ キリスト教の伝統的宗派において、洗礼式に立ち会い、受洗者の神に対する契約の証人となる役割を負う女性。ここでは、カトリック。

⁴ Amtrak とはアメリカ合衆国の連邦政府が出資する公共企業体で鉄道旅客運送を運営する。アメリカ本土四十六州とカナダの三州で運行されている。

⁵ 「ゴヤと啓蒙精神」(Goya and Spirit of Benightment) という展覧会。スペインのマドリッドにあるプラド美術館からの巡回展で、ボストン美術館での開催を経て、最後にメトロポリタン美術館で開催された。アリスの日記によると一九八九年五月。

⁶ 執筆メモ：本書では、「黒人」と「アフリカ系アメリカ人」を主に区別せずに用いる。凡例？

級スペイン語の集中コースに参加する。十週間で一年分を学ぶ。授業は月曜日から金曜日まで毎日五時間あり、クラスメイトにはバスケットボール選手や宇宙工学を学ぶ学生、ハーバード大学の受講生もいた。留学生はわたしひとり。寮の部屋もひとり。

前半の五週間の担当はカナリア諸島出身の教授だった。柔らかい金髪おかっぱで、牛の描かれたパネルを見せて、「ウナ・バカ」(una vaca, /u.na 'βa.ka/)と繰り返し発音し、わたしたちにも発音するようにうながす。たましいがゆれる。

En este momento nació mi cuerpo que escucha español.

このとき、スペイン語を聴くわたしの身体が生まれたのです。

うん？ これは日本語のような響き。母音が五つで同じだから。リズムも音節が一定の間隔で発音される、いわゆる音節拍言語(syllable-timed language)で、英語⁷より日本語⁸にだんぜん近い。強勢^{アクセント}がある音節は長くなるものの、つづりに母音がある限り、その母音を一つひとつ発音してよいのだ。しかも「v」が「b」の音ではないか、おお。冒頭の「u」は日本語の「ウ」よりは強いけれど、全体としては「アメリカの英語」をしゃべるときほどには身体のチューニングをしなくてよい。あ、まって、名詞には性があるのね。牛の場合は、雌牛(una vaca)と雄牛(un toro)だからわかりやすいけれど、たとえば、魚(un pez)は常に男性名詞なのに、蝶(una mariposa)は常に女性名詞だというし、この机にも椅子にもノートにも性別がある。冠詞が光って見える。

Me llamo Alicia. Soy del País de las Maravillas. Mucho gusto.

わたしの名前は、アリシアです。不思議の国から来ました、よろしく。

後半の五週間の担当はメキシコにルーツのある教授だった。日焼けした肌に白髪まじりのひげ、登山が好きそうな人にみえる。スペイン語と英語で書かれた分厚い教科書(車移動を前提としているのかな?)を使い、文法と語彙をみっちり学ぶ。うん？ これは英語との共通点が多い。文は動詞を核とし、時制の概念もある。主語について六つのカテゴリー(一人称、二人称⁹、三人称の三つ×単数・複数の二つ)がある。主語の人称や数、時制、法(初級なのでまだ直接法だけ)により、動詞の形を細かく変える。だから、主語の省略もできる。大学院生のTA(Teaching Assistant)に励まされ、定型表現を叩き込み、リスニングも浴びるようにする。「聞こえてくる音のループを頭のなかで回してみて。すぐにはわからなくても、意味や文法もあとから来るよ」。

母語(日本語)の外に出て、「アメリカ」にいるのに英語の外にも出て、スペイン語の世界へ出かける。クラスメイトたちは「アメリカ人」で、英語を母語とする人

⁷ 英語は強勢が等間隔で繰り返されるリズム(stress-timed language)。

⁸ 日本語はモーラ(拍)で均等にリズムが形成される(mora-timed language)。

⁹ 話の相手(二人称)については、丁寧にあつかう「敬称」(formal)と、親しく、あるいは目下にあつかう「親称」(informal)というカテゴリーに分ける。これは英語とは異なる。

が多かったけれど、家庭では別の言語を話す人もいた。授業ではスペイン語で話すことが奨励されているから、わたしは「アメリカの英語」からスペイン語という綿にふんわりと守られて、そこにいる。教室での授業のほかに、エクスカーションが頻繁にあり、わたしたちは一緒に動物園に行ってラテンアメリカから来た動物（armadillo や tamandúa やさまざまな鳥類）をみたり（中国から来たパンダもみて、/ˈpændə/ではなく/ˈpanda/と発音したり）、美術館に行ってスペインやラテンアメリカの芸術家（El Greco や Diego Velázquez や Francisco de Goya や Salvador Dalí や Diego Rivera に Frida Kahlo）を鑑賞したり、ヒスパニック系コミュニティのレストランに行ってフライドチキン(pollo frito)をほおぼったりする。

イサベルの旅、あるいは、¿Qué significa América?¹⁰

正義を求めて旅立つ
歩くたびに
足元から地図がほどけていく

手のなかにあるのは紙切れひとつ
自由を示す、その薄い誓いを、
風がいくらでも引き裂こうとする

一六〇〇年、ケレタロの町を出たとき、
先住民たちが暮らしていた大地には、
わたしたちの足音を拒む声が響いていた

リオコンチョス川の流れは、
砂漠の果てを目指す者たちをのみ込みながら、
問いかけるように叫び続けていた

「あなたが越えようとするものは、
ただの川か、それとももっと深い、
忘却の海なのか」と

彼女は川を渡る
水のなかで押し流される砂利にもまれる
それはすべて、奪われていく土地の苦しみ

¹⁰ この詩は、以下の文章へのオマージュ。「第一章 イサベルの探検——一六一九年以前の北米における黒人女性の自由」、ダイナ・レイミー・ベリー、カリ・ニコール・グロス著、兼子歩、坂下史子、土屋和代訳、『アメリカ黒人女性史』勁草書房、二〇二二年。なお、アリスのカトリックネームは、この文章に登場する女性と同じく、イサベル。

砂漠はわたしたちを押し戻そうとする。
その乾いた風は、
言葉にならない悲しみを含んでいる

彼女は歩いた、歩き続けた
足跡の先に未来があるとは限らないけれど、
戻る場所もなかった

アフリカの父と、
先住民の母のあいだで生まれた彼女の自由は、
スペイン遠征隊と薄い紙と神に守られていた

「わたしは生きる」
たとえこの旅が歴史に消されても、
歩いた時間だけは大地が覚えているだろう

彼女の旅の上に続く足跡が、
わたしたちの世界を支えている
けれどそれに気づく者は少ない

名前のない無数の声が風に漂っている
イサベル、と、遠くから響いてくる声にふりむく
「アメリカ」の意味を教えてほしい

ナショナル・モール

Unya, もう一回言わせてね。
オーケイ、déjame decirlo otra vez.

ここではない、どこかに行きたい、でもそれはとても特権的なこと
Moadto unta ko sa lugar nga dili dinhi, pero pribilehiyo ra kaayo na.

ジョージタウン大学での毎日は、長い授業でリズムが刻まれ、宿題も多いため、講義室と視聴覚室、図書館をめぐりながら、スペイン語を学ぶだけで暮れていく。昼食をクラスメイトとカフェで一緒にするほかは、誰かと気楽に会話をかわすこともない。「アメリカ」ににいるのに「アメリカの英語」に生で触れていない。幼稚園でレコードを回していたときのほうが、よほど「アメリカ」に近かったように感じる。「アメリカ」留学してスペイン語を学ぶという状況には「ねじれ」があり、それはわたし自身が作りだしている。どこかに落ち着いたり、だれかと親しい関係が続けたりすることに、言葉にならない恐れを抱いている。だから、日本にいれば日本語から英語へ、「アメリカ」にいれば英語からスペイン語へと、自分の位置をずらしていく。

週末、スペイン語学習をはなれ、ジョージタウンからナショナル・モールへ向かう。まるで「アメリカ」が凝縮された巨大なパビリオン。ワシントン記念塔が天に伸び、リンカーン記念堂が静かに佇む。設計したピエール・シャルル・ランファンは、この地を未来の都と見立てた。目をつむる。かつてここには湿地と森が広がり、先住民が暮らしていた。^{the District of Columbia} コロンビア特別区の発展には、多くの労働者、^{e n s l a v e d} 奴隷にされた者たちが関わっていた。「白さ」をつくる白くない手。湿った空気が肌にまとわりつく。ベトナム戦争戦没者慰霊碑や第二次世界大戦記念碑が語りかける。一九六三年の「ワシントン大行進」の声がいまも芝生に染み込んでいる。歴史がこちらを見つめ返している。はずなのに、なにかが耐えがたく軽い。日本の泡のような儚い好景気に包まれてふわふわする。

七月四日の独立記念日に花火を見たほかは、ほとんどの時間をナショナル・ギャラリーの西館ですごす。訪れるたびに、クロード・モネの *Woman with a Parasol—Madame Monet and Her Son*¹¹の前にしばらく立つ。「まぶしい」、それが最初の印象。何度も見るうちに、吹き抜ける風の音が聞こえ、カミーユの目線がふとこちらに向く。息子のジャンも、少しずつ表情を変えていく。ある日はおとなしく、ある日はやんちゃになる。わたしもほほえんだり、たしなめたりする。変わりゆく光と空気に包まれ、やわらかな草の上を散歩する。雲が流れてゆく。ふたりを描いているモネの表情も流れてゆく。カミーユがからだをこわすと、モネはパトロンの妻アリスと深い関係になり、カミーユはやがて早逝する。ミュージアムショップで、この絵のポスターを買う。

八月の初め、ジョージタウン大学でのスペイン語集中コースの最終試験が行われる。筆記試験は三時間ほどあり、文法、読解、作文、リスニングと習ったことをすべておさらいする。試験中なのに立ち上がってストレッチしたり、床に答案用紙をもってねそべって解く仲間がいたり、先生がごくあたりまえのようにドーナツとオレンジジュースを配ったりする（午前中なので、朝食？）。いやこれ、試験時間が長くても日本の教室ではありえない光景ではないだろうか。Bueno, así lo hacen en Estados Unidos. まあ、これが「アメリカ」のやり方なのね。別の日に口頭試験もある。先生が質問し、それに応答する。十分のスピーチを準備し、それを議論する。トピックは「未来の計画」。未来とは自分の意志で創りだすもの。

そうなの？ 迷子にならないといいけれど！

No estoy segura. ¡Espero no perderme!

わたし、アリスは、もともとイギリスの子なのに（真実ではありません）。

Yo, Alice, aunque soy originaria de Inglaterra. (No es verdad).

¹¹ 「日傘をさす女性—モネ夫人と息子」（一八七五年）。

「アメリカ」にいるから、それらしく？　しょう。胸をはって、頭を高く保ち、アイコンタクトをとり、はっきりした声で、早口になりすぎず、適度な間をとり、傲慢ではない程度の堂々とした態度で、「自分の意見や考え」をしっかりと伝える……。ような、もうひとりの自分がどこからか立ち上がってくる。「自信」が「能力」の一部として評価されるような場にいまいるから、これが、自然？　シダが現れて、「アリス、自分を偽らずに自然体で be true to yourself」とささやくけれど、聞こえない。「日本語のわたし」が背後からささやく、まわりに合わせなさい、それが、自然。その一瞬、わたしの身体はまとまりを失いそうになり、自分がいまどこにいるのかわからなくなりかける。だいじょうぶ、y o u c a n d o i tあなたはできる。と、いかにも「アメリカ」の子のように自分自身を励ます。

Si, estamos en el país donde se sueña.

そう、わたしたちは夢をみる国にいます。

Voy al estado de Alabama en el Deep South.

わたしは深南部のアラバマ州に行きます。

¿Qué sueños tendré allí?"

そこでどんな夢をみるのでしょうか。

「深南部に行くのですね、なぜ？」。教授の声に驚きがにじむ。P o r q u eなぜなら……。わたしは、すらすらと答えられなかった。青空が少し曇り、雷雨の予感がする。

References

- U.S. Environmental Protection Agency. “PFOA Stewardship Program, 2006–2015.” <https://www.epa.gov/assessing-and-managing-chemicals-under-tsca/fact-sheet-20102015-pfoa-stewardship-program> (accessed October 15, 2025).
- University of Delaware. Official site. <https://www.udel.edu> (accessed October 15, 2025).

Autoethnographic Fiction: Alice's Adventure in Multilingual Japan¹²

**Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo
Waka Aoyama**

Chapter 7: The East Coast— In Search of “America” I

From the Library in Hiyoshi to Delaware

I wanted to go somewhere else—not here—but that desire itself was a privilege.

Admitted through a recommendation system to a private university's Faculty of Commerce, I found no passion in my studies. The pressure of entrance exams was gone, but not the pressure of being myself. From the first year, we were required to take the fundamentals of commerce—economics, business administration, commercial science, accounting, calculus, and statistics—to build our foundation as future “business leaders for an ever-changing society.” The curriculum policy promised to cultivate “a discerning eye for the times,” “specialized knowledge and skills,” and “the ability to communicate with people around the world.” In such a historic and privileged educational environment, to feel no passion seemed almost sinful. I could not quit. I studied earnestly, determined to fulfill my duty as a recommendation student. My grades were brilliant—yet the blue sky seemed to crack.

What saved me was the university's strong program in foreign languages. Students had to take English and one other language. Spanish was not offered. Between German and French, I chose French—closer to Spanish among the Latin languages. Few women were enrolled in the Faculty of Commerce, yet many of those who were chose French. English was taught by a young male scholar of literature, who instructed us in Japanese. We watched films, practiced dictation and retelling, gave presentations, and engaged in group activities—it was a colorful, lively time. French, on the other hand, was taught by an older male professor of literature, strictly through grammar and translation. The pace was fast. When *The Count of Monte Cristo* became our text, I was captivated by its story of revenge, but pronunciation practice was rare, and it was hard to breathe life into the text. It felt like swimming in a pool without water.

After completing my second year, I planned to take a year off and transfer to a university in “America.” My parents agreed to support me, but on the condition that I save money through part-time tutoring. I took on multiple students, spinning from one lesson to another. At the university's international center, I sought advice and prepared the documents—application forms, TOEFL scores, transcripts, letters of recommendation, and essays—to submit to my desired schools. Once everything was in order, I felt relieved. One afternoon, as I was about to enter the library, someone called out, “Alice!” I looked up—it was Nanase, a high school classmate whose attendance number had followed mine, still with the same bright, easy smile. “I'm going to study in England too,” he said. Oh, a

¹² In this essay, italicization of non-English expressions is used solely for readability and does not imply any hierarchy among languages.

fellow traveler. A few days later, Nanase disappeared from this world—swallowed by fire, dissolved into the sky. At the funeral, we classmates gathered. Nanase, why did you go that way?

In April, when I turned twenty, I crossed to “America” for the first time—meaning the mainland. I had time before university began in June, so I decided to take an English course for international students (ESL). I chose Delaware, the second smallest state in the U.S., because the name reminded me of grapes. (In truth, the Delaware grape comes from Ohio; the state name itself honors, Thomas West (1577-1618), the third Baron De La Warr, the first colonial governor of Virginia. When the name was given, what happened to the people who had long lived on that land?) The University of Delaware was green and spacious, its students mostly white, followed by Hispanic¹³. Having already secured admission to another university, I often slipped out of class to play the piano in DuPont Hall. Delaware is known as “the corporate state,” where company registration is easy and many famous corporations have their headquarters. DuPont was one of them—and later, it would cause severe environmental contamination and health damage through the toxic chemical C8 (perfluorooctanoic acid, PFOA)¹⁴. Not around its headquarters, but around its factories. Not in the cities, but in the rural countryside.

From Iowa to Washington D.C.

The university town where the University of Delaware is located is Newark (/ˈnu:ɑ:rk/). Although composed of two syllables—*New* and *ark*—I had the habit of inserting an unnecessary consonant, saying *New* + *wark*. People kept asking, “Huh? Where? New York?” Ah, I’m adding a sound that isn’t even there! No wonder they can’t understand me. And besides, “Americans,” as I perceived them, spoke with voices so large that their breath seemed to vibrate through their skulls and down to their chests and spines. If I wanted to be understood, I, too, would need to draw in more air, to let my voice flow like a broad river. *Strawberry shortcake* and ストロベリーショートケーキ were completely different kinds of music—and when you tasted them, they were completely different, too. Both were cakes, and both were absurdly sweet in their own way. By the time I realized that, my ESL course was over.

In May, my Japanese friends in Newark saw me off as I headed to Cedar Rapids (/ˈsi:dər ˈræpɪdz/), Iowa, in the Midwest. I was planning to transfer to a liberal arts college there from the summer term, excited to at last become a university student in “America.” But as the plane approached the region, the land below stretched out in broad, gentle plains, divided into great squares of clean green fields. The sight flooded me with darkness. Shida—the fern that follows me like a quiet companion— appeared and said, “Alice, you can’t stay here. It’s too far from the sea.” I could almost hear the wind brushing softly over the grasslands, carrying the scent of dry earth and grass. It should have been new

¹³ **Writing note:** “Latinx” (people of Latin American origin now living in North America). Check terminology later; consider adding to conventions.

¹⁴ In the United States, the regulation of this chemical substance (PFOA) began only in the 2000s.

and beautiful to me, yet I longed unbearably for the whisper of waves. I decided not to enroll. Instead, I would fly to Boston.

In Massachusetts, I visited Danuta and Tom. Danuta was the pen-pal of my childhood friend and godmother, originally from Poland. She had married Tom and moved to Boston. They were living in a photography school near Boston Common—the oldest city park in “America.” They let me stay in one of the studios. A wedding dress hung on the wall. What should I do now? I had just arrived in “America,” yet I couldn’t go back to Japan. Over breakfast at a diner—pancakes, bacon (fried in its own rendered fat until crisp), scrambled eggs with butter and maple syrup—we talked. “Why not take summer courses open to students from other universities?” Danuta suggested. “You can look for a new school while you’re here.” With their help, I found a university where I could take a Spanish course.

I boarded an Amtrak train at South Station in Boston, bound for Washington, D.C. Stopping briefly in New York City (/nju:ˈjɔ:rk/), I stayed in a hotel in the middle of Manhattan (/mænˈhætən/) and visited several museums. When I entered the Metropolitan Museum of Art, it was so vast I didn’t know where to begin. At the café, I sat beside an elderly gentleman—he said he was a member of the museum—who told me, “You’re lucky. There’s a Goya exhibition ¹⁵ right now.” Immediately, *The Third of May, 1808* came to mind—the painting I had seen at the Prado Museum before graduating from high school—and I felt a tightening in my chest. Here too, I saw his late *Black Paintings* and was enveloped in a heavy despair. But finally, in front of his last work, *Milkmaid of Bordeaux*—a dreamy young woman in a composition that seemed to float without firm balance—I felt surrounded by soft light. Only then could I breathe again.

Georgetown — My First Spanish

Georgetown (/ˈdʒɔ:rdʒ, taun/), on the western edge of Washington, D.C., is an old town that once prospered as a port along the Potomac River. In the eighteenth century, it was under the influence of slavery, and after emancipation, many Black residents lived there. Over time, its landscape changed; today it is a tourist area of cobblestone streets lined with luxury boutiques. At its center stands Georgetown University—the oldest Catholic university in “America.” The red-brick buildings, though solemn, give off an oddly fancy lightness. This summer I am taking an intensive beginner’s course in Spanish here. We will learn in ten weeks what usually takes a year. Classes are held five hours a day, Monday through Friday. My classmates include basketball players, students of aerospace engineering, and one from Harvard University. I am the only international student. I have a dorm room to myself.

¹⁵ The exhibition “*Goya and the Spirit of Enlightenment*” was a traveling show organized by the Museo del Prado in Madrid. After being held at the Museum of Fine Arts, Boston, it was presented at the Metropolitan Museum of Art in New York as its final venue. According to Alice’s diary, she visited it in May 1989.

The professor for the first five weeks was from the Canary Islands. With soft blond bobbed hair, she showed us a panel with a picture of a cow and kept pronouncing *una vaca* (/u.na 'βa.ka/), urging us to repeat it. My soul trembled.

En este momento nació mi cuerpo que escucha español.

At this moment, the body that listens to Spanish was born in me.

Wait—that sounds almost like Japanese. The vowels are the same five, and the rhythm, too: syllables pronounced at even intervals, a so-called syllable-timed language, much closer to Japanese than to English¹⁶. Although stressed syllables are lengthened, as long as there is a vowel in the spelling, each vowel may be pronounced clearly. And look—*v* is not *b* after all! The initial *u* is stronger than the Japanese “u,” but altogether it doesn’t require as much bodily tuning as when speaking “American English.” Oh, and nouns have gender. For cows it’s simple—*una vaca* (a cow) is feminine and *un toro* (a bull) masculine—but a fish (*un pez*) is always masculine, while a butterfly (*una mariposa*) is always feminine. Even this desk, this chair, this notebook—each has its own gender. The articles seem to shine.

Me llamo Alicia. Soy del Pais de las Maravillas. Mucho gusto.

My name is Alicia. I come from Wonderland. Nice to meet you.

The professor for the second half of the course was of Mexican descent. With sun-darkened skin and a beard streaked with gray, he looked like a man who might enjoy climbing mountains. We used a thick textbook written in both Spanish and English—perhaps designed for students who travel by car—and learned grammar and vocabulary thoroughly. Wait, this has much in common with English: the verb is the core of the sentence, and the concept of tense exists. There are six categories for subjects (three persons—first, second¹⁷, third—each in singular and plural). The verb changes its form according to person, number, tense, and mood (at this level, only the indicative). Because of this, the subject can be omitted. Encouraged by the graduate-student TA (Teaching Assistant), I memorized set expressions and immersed myself in listening practice. “Loop the sounds you hear inside your head,” he said. “Even if you don’t understand right away, meaning and grammar will follow.”

Stepping outside my mother tongue, Japanese—and though living in “America,” stepping also outside English—I entered the world of Spanish. My classmates were “Americans,” most of them native speakers of English, though some spoke other languages at home. Spanish was encouraged in class, and I was gently wrapped in the cotton of Spanish, protected from the roughness of “American English.” In addition to classroom lessons, there were frequent excursions: we went together to the zoo to see animals from Latin America—armadillos, tamandúas, and various birds (and also pandas from China,

¹⁶ English is a stress-timed language, in which stressed syllables occur at regular intervals. Japanese, by contrast, is a mora-timed language, where rhythm is formed by equal timing of morae.

¹⁷ In Spanish, the second person (the addressee) is divided into two categories: the formal form, used to address someone respectfully, and the informal form, used with close friends or subordinates. This system differs from that of English.

pronounced not /'pændə/ but /'panda/); we visited art museums to view works by artists from Spain and Latin America—El Greco, Diego Velázquez, Francisco de Goya, Salvador Dalí, Diego Rivera, and Frida Kahlo; we went to restaurants in Hispanic communities and bit into pieces of *pollo frito*, fried chicken, still hot with its scent of oil and spice.

Isabel's Journey, or ¿*Qué significa América?*¹⁸

She sets out in search of justice.
With every step she takes,
the map unravels beneath her feet.

In her hand she holds a single scrap of paper—
a thin vow of freedom
that the wind could tear apart at any time.

In 1600, when she left the town of Querétaro,
the land where the native peoples lived
echoed with voices that refused her footsteps.

The Río Conchos kept flowing,
swallowing those who sought the edge of the desert,
crying out as if to ask:

“What is it you try to cross—
a river only, or something deeper,
an ocean of forgetting?”

She crosses the river,
her body pressed and turned by the gravel
rushing through the water—
the pain of land being taken away.

The desert tries to push us back.
Its dry wind
carries a sorrow that cannot be spoken.

She walked, and kept walking.
There was no promise that the path ahead led to the future,
but there was no place to return to.
Born of an African father

¹⁸ This poem is an homage to the following work: “Chapter 1: Isabel’s Expedition—Black Women’s Freedom in North America before 1619,” by Daina Ramey Berry and Kali Nicole Gross, translated into Japanese by Ayumu Kaneko, Fumiko Sakashita, and Kazuyo Tsuchiya, in *A History of African American Women* (Tokyo: Keisō Shobō, 2022). Alice’s Catholic name, *Isabel*, is the same as that of the woman who appears in this chapter.

and an Indigenous mother,
her freedom was guarded by the Spanish expedition,
a thin sheet of paper, and a distant God.

“I will live,” she says.
Even if this journey is erased from history,
the earth will remember the time she walked.

Upon the trace of her journey,
footsteps continue, sustaining our world—
though few ever notice them.

Countless nameless voices drift in the wind.
From afar, one calls her: *Isabel*.
“Tell me,” she says, “what does *América* mean?”

The National Mall

Unya, let me say it one more time.
Okay, *déjame decirlo otra vez*.

I want to go somewhere else—not here—but that, too, is such a privilege.
Moadto unta ko sa lugar nga dili dinhi, pero pribilehiyo ra kaayo na.

Each day at Georgetown University follows a rhythm set by long classes and many assignments. I move from lecture rooms to audiovisual labs and the library, living almost entirely within the act of learning Spanish. Apart from having lunch with classmates at the campus café, I rarely speak casually with anyone. I am “in America,” yet I have almost no direct contact with “American English.” When I was a child spinning records in kindergarten, I may have been closer to “America” than I am now. Studying Spanish while studying abroad in “America” is a kind of twist—one I have created myself. I feel an unspoken fear of settling down, or of sustaining intimacy with anyone. So, in Japan I move from Japanese to English, and in “America,” from English to Spanish—always shifting my position slightly.

On weekends I leave my Spanish lessons behind and go from Georgetown to the National Mall. It is like a vast pavilion where “America” is condensed. The Washington Monument rises to the sky, the Lincoln Memorial stands in quiet dignity. Pierre Charles L’Enfant, who designed the plan, envisioned this place as a future capital. I close my eyes. Once this land was swamp and forest, home to Indigenous peoples. The growth of the District of Columbia involved the labor of many workers, including those who were enslaved—nonwhite hands that built “whiteness.” The humid air clings to my skin. The Vietnam Veterans Memorial and the World War II Memorial speak in silence. The voices of the 1963 March on Washington still soak into the grass. History looks back at me. Yet something feels unbearably light. I drift, wrapped in the buoyant prosperity of Japan’s bubble economy.

Aside from watching the fireworks on the Fourth of July, I spend most of my time in the West Building of the National Gallery. Each visit, I stand for a while before Claude Monet's *Woman with a Parasol – Madame Monet and Her Son*. "Dazzling"—that was my first impression. After seeing it many times, I begin to hear the sound of wind sweeping through, and Camille's eyes seem suddenly to meet mine. Her son Jean's expression shifts as well: calm one day, mischievous the next. I smile, then gently scold him. Wrapped in changing light and air, I walk across the soft grass. The clouds drift on. Even Monet's face, painting the two of them, drifts with the light. When Camille's health declined, Monet grew close to his patron's wife, Alice, and Camille soon passed away. I buy a poster of the painting at the museum shop.

In early August, final exams are held for the intensive Spanish course at Georgetown. The written test lasts about three hours, covering grammar, reading, composition, and listening—everything we have studied. Some classmates stand up to stretch during the exam; others lie on the floor with their papers, writing as they please. The professor, as if it were perfectly normal, passes out doughnuts and orange juice—it is still morning, so perhaps breakfast? Even for a long exam, such a sight would be unthinkable in a Japanese classroom. *Bueno, así lo hacen en Estados Unidos*. Well, that's the "American way." Another day comes the oral exam. The teacher asks questions; we respond. We prepare a ten-minute speech and discuss it. The topic is "Plans for the Future." The future—something one is supposed to create by one's own will.

"Really? I hope I won't get lost!"

No estoy segura. ¡Espero no perderme!

I, Alice—though I was born in England. (Not true).

Yo, Alice, aunque soy originaria de Inglaterra. (No es verdad).

Because I am in "America," should I act accordingly? Stand tall, keep my head high, make eye contact, speak clearly, not too fast, pausing just right—with confidence, but not arrogance—and express my own opinions and ideas firmly. From somewhere, another self rises up inside me. I am in a place where "confidence" counts as part of one's "ability," and so perhaps this, too, is natural? Shida appears and whispers, "Alice, *be true to yourself*," but I cannot hear them. The "Japanese me" whispers from behind, "Blend in. That is natural." For a moment my body begins to lose its coherence, and I nearly forget where I am. "You can do it," I tell myself, sounding like an "American child."

Sí, estamos en el país donde se sueña.

Yes, we are in the land of dreams.

Voy al estado de Alabama en el Deep South.

I'm going to the state of Alabama, in the Deep South.

¿Qué sueños tendré allí?

What kind of dreams will I have there?

“You’re going to the Deep South—why?” the professor asks, surprise in his voice. *Porque*... because... the words caught in my throat. The blue sky dims slightly; thunder is in the air.

References

- U.S. Environmental Protection Agency. “PFOA Stewardship Program, 2006–2015.” <https://www.epa.gov/assessing-and-managing-chemicals-under-tsca/fact-sheet-20102015-pfoa-stewardship-program> (accessed October 15, 2025).
- University of Delaware. Official site. <https://www.udel.edu> (accessed October 15, 2025).